

本年度の重点に対する評価

本年度の重点	1	教師の授業力向上を推進し、学力の向上を図る。
目標(評価規準)		○教師自身が、自らの授業力向上を実感する。○児童が、学力の向上を実感する。
重点に係る現状 設定理由		○子どもの学力向上を図るため、授業力を向上させる必要がある。 ○授業力向上にむけての意欲は十分にもっているため、校内研究を中心に、授業力向上を目指す。 ○子どもは、概ね授業に前向きに取り組んでいるが、基礎学力の定着に課題がある。

評価資料	評価
教職員アンケート結果 (具体的方策ごと)	○教師が自らの授業や支援を振り返り、改善の手応えを実感する段階に到達した研究であったと言える。その結果として、児童においても「わかる」「できる」「取り組める」場面が増え、学力向上の兆しが見られ始めている。
各アンケート等の結果	○児童向けアンケート項目「わたしは、勉強がわかるようにながらんでいます」において、肯定的回答が83%であった。児童の意欲を喚起する点として十分に評価できる。 ○児童向けアンケート項目「わたしは、勉強していることがよくわかります」において、肯定的回答が76%と概ね良好な評価であった。今後、さらにわかる授業をめざして今後の改善方針に生かしたい。 ○保護者向けアンケート項目「学校は、子どもたちが意欲的に学習し、基本的な学力が身につくように努力している」において、肯定的回答が91%であった。
自己評価結果 (見解と改善方策)	本校の校内研究は、学校教育目標「自分らしく いきいきと」を研究主題に据え、児童の実態を出発点として進めてきた点に大きな意義があった。長年継続してきた主題であるからこそ、今年度は「今の岬陽小の子どもたちにとっての『自分らしく いきいきと』とは何か」を問い直し、授業・支援・環境の三つの視点から具体的な実践につなげることができた。 授業研究グループでは、児童の読みの流暢性や語彙の不足といった学力上の課題を明確に捉え、多層指導モデル(MIM)の考え方を取り入れた指導を実践した。月ごとのアセスメントと指導の積み重ねにより、児童の反応や成果の変化を実感する場面が増え、教師自身が「手立が学力の変化につながる」ことを実感できたことは大きな成果である。 合理的配慮グループでは、「できない子への特別な支援」という捉えから、「ヒントがあればできる」「環境や提示の工夫で参加できる」という見方へと教職員の認識が転換された。これは、インクルーシブ教育の本質を授業実践の中で具体化したものであり、授業づくりそのものの質を高めることにつながった。 学習環境グループでは、環境を変えることで児童の集中や理解がどのように変化するかを検証し、実際に試行することで、授業改善に直結する視点を教職員が共有できた。環境づくりが授業の一部であるという意識が広がったことは、教師の授業観の深化につながっている。 一方で、課題も明確になった。授業の1時間を通じた構造や発問の工夫、グループ間での研究内容の共有の不足、高学年におけるMIMや多層指導モデルの位置づけなど、学校全体で共通理解を深める必要性が指摘された。また、「研究のハードルは下がったが、授業そのものを見合い、語り合う機会が十分であったか」という問いは、来年度に向けた重要な視点である。
学校関係者評価結果	・ICT活用や小グループ学習など、授業改善への工夫が見られ、教師の努力と前向きな姿勢が評価できる。 ・児童の学力差・理解力の差が大きい中で、授業の「ストライクゾーン」をどこに設定するかは大きな課題である。例えば非常勤講師による算数の個別支援は、「すべての子どもを取り残さない」具体策として評価できる。 ・学力差は発達差・個人差でもあり、短期的な到達度だけでなく、自己肯定感や学ぶ楽しさを育てる視点が重要である。
最終改善方策	・「学力向上」を到達度のみで捉えず、「分かる喜び」「できる実感」を積み重ねる授業改善を推進する。 ・学力差を前提とした授業設計(習熟度配慮・個別最適な学び・支援体制の明確化)を校内で共有する。 ・非常勤講師等の人的資源を活かし、基礎の定着と自己肯定感の育成を両立させる支援体制を強化する。

本年度の重点に対する評価

本年度の重点	2	温もりのある雰囲気づくりに努める。
目標(評価規準)	○子どもが、「自分の学級は温もりがある」と実感する。○教師が、「自分の学級は温もりがある」と実感す	
重点に係る現状 設定理由	○学校全体は落ち着いた状況にある。温かみのある学級風土を醸成することにより、一人ひとりの学習環境を整えたい。	

評価資料	評価
教職員アンケート結果 (具体的方策ごと)	○教師向けアンケート「課題や悩みなどについて、ほかの職員に相談しやすい環境である」の肯定的回答が93.2%であった。 ○同様に、「それぞれの学年ブロックにリーダーがいるのがよかった。学級で問題が発生した時に、まず誰に相談すればよいのかがはっきりしていて、スムーズに対応することができた。」という自由記述があるように、組織的な対応に高評価がある。
各アンケート等の結果	○児童向けアンケート項目「わたしは、学校へ行くのが楽しいです」において、肯定的回答が91%であり、概ね充実した学校生活を送っている様子がうかがえる。今後も楽しくいきいきと過ごせる学校づくりを進めていきたい。 ○児童向けアンケート項目「わたしは、友達となかよくしています」において、肯定的回答が91%であった。 ○保護者向けアンケート項目「子どもたちは、自分らしくいきいきと学校生活を送っている」において、肯定的回答が96%であった。 ○保護者向けアンケート項目「子どもたちは、集団行動の中で助け合いやおもいやりの姿勢が育っている」において、肯定的回答が93%であり良好な評価ととらえる。
自己評価結果 (見解と改善方策)	○本校では、学年や学級の分け隔てなく、各教員が日常的な指導を積み重ねていく中で、児童一人ひとりととの良好な関係を築くことができている。担任一人が学級すべての子どもを丸抱えすることなく、専科、特別支援などさまざまな形で学級の子どもたちを複眼的にみとり、児童の実態や教育的ニーズのあるなしを確認しあえるチームになっている。児童支援グループには、それらの活動の中で課題になることを共有するシステムがあり、これを教育相談コーディネーター、特別支援コーディネーターが差配しながら様々な支援につなげていく。 ○学校スローガン「自分らしく いきいきと」が教職員、児童ともに定着している。児童の自己肯定感を高めることを常に意識して指導している。児童同士のかかわりあいとして春の遠足を高学年がリードしたり、毎月の朝会を児童会(本部会)が仕切ることをとおして上級生が下級生にリーダーとしての姿を見せている。子どもたちに「助け合いや思いやりの姿勢」が育ってきていると実感している。 ○学校へ行くのが楽しくないと感じている児童の回答が4%あることにも目を向けていきたい。いじめの未然防止・初期対応の観点からも年2回の教育相談と個人面談をとおした児童理解の観点と、学年部ごとのチーム体制の強化による「いつでも相談できる」姿勢を示すことにより、これまで以上に一人ひとりに寄り添い、きめ細かな指導をしていきたい。
学校関係者評価結果	・校内掲示や図工作品の展示から、子どもを大切に作る雰囲気が感じられる。 ・不登校傾向の児童がほほえないことは、温かな人間関係づくりの成果として高く評価できる。 ・人間関係を原因とした不登校が見られない点は、学校風土の健全さを示している。 ・SNS・スマートフォンによるトラブルは、学校だけでは対応困難でありながら、学校風土に影響を与える重大課題である。
最終改善方策	・子どもの作品展示や活動の可視化を継続し、自己存在感を高める環境づくりを継続する。 ・SNSトラブル防止について、保護者啓発と児童指導を両輪で進める。 ・いじめの未然防止・初期対応を念頭に、「安心して過ごせる」だけでなく、「安心して本音を言える」関係づくりへと深化させる。 ・不登校ゼロを成果として固定化せず、予防的支援と早期対応の体制を継続的に整える。

本年度の重点に対する評価

本年度の重点	3	学校内外の安全の確保を目指し、地域・保護者との連携を図る。
目標(評価規準)		○保護者が安全確保のための連携の充実を実感する。
重点に係る現状 設定理由		○地域の団体等の尽力で、子どもの登下校における安全確保がなされている。 ○安全確保は、子どもの安全安心を守る必要条件なので、諸団体と連携を図りながら取り組んでいく。

評価資料	評価
教職員アンケート結果 (具体的方策ごと)	<p>○ほとんどの教職員が学校内外の安全を確保し、地域・保護者と連携を図っていると肯定的にとらえている。</p> <p>○教職員向けアンケート項目「施設設備への「安全」の対応ができています」では、61.7%の肯定的な回答があった。</p> <p>○教職員向けアンケート項目「事故・トラブルなどの対応は迅速・適切にできる体制が整っている」では、86.4%の肯定的な回答があった。</p> <p>○教職員向けアンケート項目「学校は、家庭・地域との連携がなされている」では、75.0%が肯定的な回答であった。</p>
各アンケート等の結果	<p>○保護者向けアンケート項目「学校は、保護者や地域との連携を大切にしている」において、肯定的回答が91%であった。</p> <p>○保護者向けアンケート項目「学校の情報や考え方が、学校だより・学級通信等により伝わってくる」において、肯定的回答が96%であった。</p> <p>○保護者向けアンケート項目「学校は、子どもの安全に配慮し、環境整備に努力している」において、肯定的回答が87%であった。</p>
自己評価結果 (見解と改善方策)	<p>○本校では、地域団体・交通指導員・見守り隊・保護者の皆様の尽力により、登下校を中心とした子どもの安全確保は、日常的かつ継続的に行われている。</p> <p>○教職員もその必要性を強く認識し、主体的に関わっている点は、本校の大きな強みである。</p> <p>来年度に向けては、 「安全確保の実践」+「連携の見える化」を重点に据え、以下の改善を図る。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.地域・学校・保護者の連携体制の整理と発信 見守り体制や「誰が・いつ・どこで」関わっているかを分かりやすく伝える 2.教職員間での共通理解の深化 安全確保に関する取組を校内で整理・共有し、年度当初に、役割や対応の確認を行う 3.子どもが「助けを求めやすい」環境づくり 日常的な声かけ、相談しやすい雰囲気づくりによって「困ったときは伝えてよい」というメッセージを、指導の中で繰り返し伝える 4.安全＝安心という視点の拡張 校内環境(トイレ・教室・生活空間)も含めた安心感の向上
学校関係者評価結果	<ul style="list-style-type: none"> ・校舎設備(特にトイレ環境)の改善要望があり、安全・安心は施設環境とも直結している。 ・地域店舗等での不適切行動への対応について、地域は学校に指導力を期待している。一方で、学校の働き方改革や法的制約とのバランスが課題である。 ・学校・地域双方に「期待」と「制約」があり、相互理解の不足が不満につながる可能性がある。
最終改善方策	<ul style="list-style-type: none"> ・校内外トラブル対応の原則(学校の役割・地域の役割・法的制約)を整理し、共有する場を設ける。 ・地域との情報共有ルールを明確化し、「学校頼み」でも「地域任せ」でもない協働体制を構築する。 ・施設面の改善については、優先順位を整理し、教育委員会と連携して継続的に協議する。